

原子力緊急事態継続中

コメント
八巻俊憲
福島県郡山市



「原子力緊急事態」はまだまだ続く

<事故以前>

「原子力発電所は「止める、冷やす、閉じ込める」という考え方で安全を確保するように設計されています」（東京電力HP）

<事故時> ところが、電源喪失により、
止めても、冷やせない、
冷やせなければ、閉じ込められない
となつた！

<現在> いまだに閉じ込められない
「止めた、まだ冷やしてる、でも閉じ込められない」状態
→ だから緊急事態継続中

安全の考え方

- 「原子力は安全だ」と言う人間が扱うと危険で、「危険だ」という人間が扱うとき、かろうじて安全である。
- 今までには、二重、三重の安全装置があって、このような事故はほとんど起こらないと言われてきた。ところが実際には起こってしまった。
この事実をどう受け止めるべきか、が問題なのである。

武谷三男（1979）「原子力と人類の将来—その魔性を克服する道」

モンスターのイデオロギー（武谷三男，1979）

- ✓巨大科学は巨大装置と結びつく。
- ✓そのためには巨大資本を投下しなければならない。
- ✓するとこの巨大装置はひとつの“モンスター”に変身し、それに関連するあらゆるものもモンスターの従者にしてしまう。
- ✓そうなるとモンスターを中心とした体制的イデオロギーができ上がる。
- ✓大きなものを作ると、それが本当に立派なものだと思う信仰ができてしまう。

フクシマ・モンスター

- このモンスターがついに火を噴いて斃れたのが福島原発事故
- その死骸の処理には、桁外れのコストと時間がかかる
- 現在行われているのは、
「廃炉」ではなく「事故処理」に過ぎない。
- 「廃炉」は超長期にわたるモンスターとの戦い

富岡町から郡山に移り住んでいる人のお話

- 30～40年で廃炉というロードマップについて
 - ・ できると誰も思ってない。
 - ・ 自分たちにはどうせ間に合わないし、200年かかるだろう。
 - ・ 本当は何とかなってほしいとも思うが、もうどうでもよい、
やってにやって、という感じだ。
 - ・ （関係者も）誰も責任をもっていない。
 - ・ 幕末の志士のように、50年、100年先の日本を考えて行動する人間が必要だ。

■ トリチウム汚染水の扱いについて

- ・水蒸気として放出できるのなら・・
- ・（海洋放出は）漁業者としては困るだろう。
魚への影響ではなく、風評被害が問題。
- ・自分も（たとえば）福島の米は買いたくない（と思う）・
- ・正論では、流すべきではないと思うが、避難生活における苦労が先立って「どうでもよい」という感じになってしまっている。

■ 被災地の復興と帰還について

●やっていることの優先順位が違う

- ・伝承館など、いまつくる必要ない、
- ・JR常磐線や高速道路も、地元での生活では使わない
- ・郡山から行くには、高速（無料）は便利だが、より短距離の288号線が中間貯蔵への土壤搬送のトラックで渋滞しているため。
- ・つくるなら、大病院、介護施設などが必要。（診療所では行かない）・
- ・火葬場が稼働しておらず、葬式もできない。いわき市まで行かないと。

●地元では仕事ができない

- ・事故前にあった工業団地が閉鎖になり、仕事がなくなつた。
- ・かわりにイノベーションコストのような事業所ができるても、地元の人は、勤めようがない。町工場のような（身近な）企業があればよいが、レベルの高い企業ではついていけない。
- ・商売などで戻る人はいるが、多くは戻らない。
- ・若い世代はこちらに根付いて、定住するだろう。

● 帰還しても米作りができない

- ・住宅と田んぼを除染されても、周囲（畔、防風林など）はさarezu、線量が高いまま（で被ばくは免れない）。
- ・除染後の田んぼで、もとのように収穫できるようになるには5年かかる。
- ・農業再開のための助成制度はあるが、50代以上は申請できないルールがある。若い世代か、後継者がいないとだめ。

● 環境省の対応が悪い

- ・申請書をなくす、電話番号を間違えて1年以上も行方不明扱いにされたが、謝りもしない。何年もの間、こんな感じ
→ それがストレスになる。

■ 社会的合意のあり方について

- ・公聴会など、証拠作りをしているだけ。
- ・法律をつくるのとはちがう（ので、今のやり方ではだめ）
- ・避難後、8～9年目には、あきらめムードがただよっている。
- ・県にも、自治体にも省庁にも、何を言っても満足な答えは返ってこないため、あきれて、「もうどうでもいい」という感覚になっている。

いわき市に住む女性のお話

■トリチウム汚染水について

- ・廃炉のために海洋放出して欲しいとは思っていない。
- ・海洋放出には反対が多い。
- ・地元の魚を食べたい。小名浜港の魚介を普通に食べている。
- ・よそには売っていない。漁獲量も少ない。値段も安い。漁師さんはぎりぎりでやっている。

■廃炉について

- ・30～40年ができるわけがない。
- ・労働者が毎日いわき市から原発に行っているが、よくなっているようには見えない。
- ・デブリの取り出しが難しい。廃炉はあきらめている。永久に無理だと思う。
- ・原発を受け入れた時点で、すべての責任を受け入れざるを得ない。先代の人が決めたことだが、今の人々がすべて飲まなければならない。
- ・原発を受け入れるということは、大きなリスクも含め、すべてをずっと受け入れざるを得ない、そういうことだということがわかった。

社会的合意形成の問題（八巻）

「市民参加」による民主的な政策決定という前提に対して

1. 「科学」に関する対立構造がある

「体制」に奉仕する科学 VS 「生活者（市民）」のための科学

2. 科学が中立だという誤解がある

科学的思考の過程には、規範性（研究者の姿勢、人道的観点）が反映する。

3. 市民参加を認めるだけでは、結果は変わらない。

決定プロセスや、最終決定の権利が依然として体制側にある限り、形式的な市民参加が、アリバイつくりに悪用される危険がある。

生の基本的条件（オルテガ）

1. われわれの生とは、あらゆる瞬間において、しかも何よりもまず、われわれにとっての可能性を意識することである。
もし一瞬ごとに、ただ一つの可能性しかなかったとしたら、それを可能性と呼ぶのは無意味であろう。
2. 生とはすべて、環境つまり世界のなかに自己を見出すことである。

『大衆の反逆』 1930